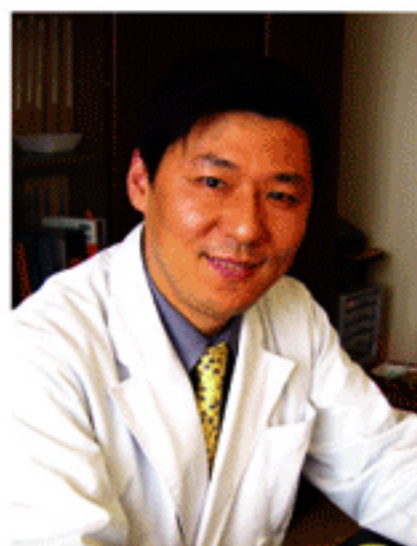


★中国★  
13億を拓く

# 上海、美容整形のトップを走る盛・美容外科 ～上海の日本人、「美容整形」を再評価～

盛・美容外科



盛・美容外科 盛虹明院長

タクシーの助手席後部に掲げられているのはほとんどが美容整形の広告、昨今は16カ所も施術した人造美女が話題をさらい、人造美女コンテストなるものも開催されるようになった。衣食足りた中国で、女性たちは身銭を切って美を求める。が、市場は玉石混交。この「石」がゴロゴロしているような現状を危惧し、盛・美容外科の盛虹明院長が「あるべき美容整形」を語ってくれた。

**本** 来、美容整形はビジネスにはできないはずなのですが、と前置きをしながら、盛・美容外科の盛虹明院長は昨今の美容整形市場について、ポツリポツリと話し始めた。

中国の美容整形市場は年々拡大の一途、国家统计局の2003年の数字によると12万9000人超が何らかの整形を行ったという。うち女性は48・5%の6万人超。同年の美容産業の総生産額は2100億元、うち美容整形は10%を占めた。もちろんこの2年で爆発的な成長を遂げていることは想像に難くない。

衣食足りた中国人が求めてきたのは「健康」、そしてこれから求め

るのは「精神的に満たされる喜び」だ。「美容外科は精神科の一部」というのは盛院長の持論。「顔の傷を気に病むあまり鬱病だった人が堂々と外出できる、美容外科はそんなふうに変えることができる、精神の健康を取り戻すことができるのです」（盛院長）

一方、自分の外見を変えることに躊躇しないのが中国の女性だ。外人女性に生きた馬の目を抜く上海で生き残るため、また上海人女性には有利な就職を導くためと、それぞれの思いで施術を受ける。そして、「あたし、ここを整形したの、ほら見てよ」といわんばかりに周囲にふれまわる。「親からももらった顔を傷つけるなんて……」などという発想はまるでない。

これだけ拡大する市場なら日本の美容業界も放っておかないはずだ。ところが、日本人の医師がやるとなぜかうまくいかないのがこの市場だという。「日本人はなるべく目立たない整形を好むのに対して、中国人は投じた資金相応の変化を求めます。日本人医師にとってこの要求を叶えることは大変難しいのです」（同）

## 消費者に求められる見極めの眼

中国では同じ商品でも粗悪品と高級品にはつきり分かれるように、美容整形もその価格はピンキリ。二重まぶたは500元前、想像を絶する安さと手軽さでできてしまう。傷口を縫う糸はたった5元で手に入る黒くて太いタコ糸のようなものだ。「彼らが行うのははや整形

ではなく破壊行為」という人もいるくらい。訴訟が多いのもこの底辺部の整形だ。一方、先端部でも問題は発生する。「嫩肤美白素（若婦り美白注射）」「一针祛眼袋（注射による眼下のたるみ除去）」などまだ臨床では用いることのできない技術を吹聴する美容外科もある。「患者がより新しいものを追求する限り、未完成の技術でも簡単に市場に出回ってしまいます。メスを使う昔ながらのやり方が一番安定しているんですがね」と盛院長はいう。

## 変わり始めた日本人の受け止め方

玉石混交するこの上海で04年9月に開業したのが美容外科、上海では恐らくメス捌きで彼の右に出る者はいないだろう。それを証拠にいまや中国全国から患者が彼の診療所にやってくる。予約台帳はすでにスケジュールがびっしり。だが、盛院長の施術回数は相変わらず



診察室。ここで1時間にわたるカウンセリングを行う

らず以前のまま。「大きい手術なら1日1件、小さいものなら2件までと決めています」（同）。どんなに患者が殺到してもカウンセリングは手を抜かない。「ひとり1人の施術は私にとっての作品」という盛先生は従来通り、みっちり1時間をかけている。

「日本だったら美容整形はれっきとしたビジネス、チェーン展開は当たり前。でも私は技術にプライドがある、チェーンを出さずとも今や全中国、全世界から患者さんが集まってくれます」（同）

ちなみに盛・美容外科の患者さんは日本人が8割。お母さんは二重、お父さんはホクロ、お父さんはまぶたのたるみというように家族で気軽に利用するケースも増えている。「盛先生と出会わなかったら私は一生美容とは無関係だった」という日本人女性も。日本では少し後ろめたさを感じる美容整形だが、盛院長のカウンセリングと施術で上海の多くの日本人が「精神の健康」を取り戻している。●



手術室。1日3回しかこの部屋は使わないと盛院長